

平成 30 年度拡大経営会議について

平成 30 年 5 月 1 日
公益財団法人鉄道総合技術研究所

公益財団法人鉄道総合技術研究所（以下、鉄道総研）は、下記のとおり、管理職約 130 名を集めた「平成 30 年度拡大経営会議」を開催いたしましたのでお知らせいたします。本年度の会議の議題は、「研究開発のポテンシャルを高める取り組み」としました。

会議は、会長 正田英介の訓示に始まり、理事長 熊谷則道による鉄道総研のミッションに関する講演、常勤役員による研究開発のポテンシャルを高めるための事業展開と目標に関する講演ならびに各研究部等での取り組みについて研究部長等が報告を行いました。その後、テーマディスカッションにおいて研究開発のポテンシャルを高めるために何をすべきかについて議論を行いました。

記

開催日時：平成 30 年 4 月 19 日（木） 15 時 00 分から 17 時 30 分

開催場所：パレスホテル立川（東京都立川市）

参加者：役員、部門長、研究部長等、課長、研究室長ほか 計 133 名

議 事

- | | |
|---------------------------|-----------|
| 1. 訓示 | 会長 正田英介 |
| 2. 鉄道総研のミッション | 理事長 熊谷則道 |
| 3. 研究開発のポテンシャルを高める取り組み | |
| (1) 事業展開と目標 | |
| ① 持続可能な研究所の運営に向けて | 専務理事 澤井 潔 |
| ② 研究開発のレベル向上と成果の品質向上 | 専務理事 高井秀之 |
| ③ 地域鉄道の活性化を支援する戦略的取り組み | 理事 米澤 朗 |
| (2) 研究部等の「ポテンシャルを高める取り組み」 | 各研究部長等 |
| (3) テーマディスカッション | |

テーマ「研究開発のポテンシャルを高めるために何をすべきか」

モデレータ：理事 芦谷公稔

正田会長訓示要旨

本日の会議の議題は「研究開発のポテンシャルを高める取り組み」です。ポテンシャルを Webster の辞典で調べると、開発を実行に移せる可能性であるとか、あやふやな可能性・自由度・能力など出てきますが、いずれも一般的な不確定な可能性を示していて、研究開発のポテンシャルとしてはもう少し具体的に考える必要があるでしょう。ただ、ポテンシャルの概念には実際に実現するどうか「あやふやな」状態が含まれている点に注意してください。「あやふやな」というと頼りない指標の印象をもたれるかもしれませんが、逆にそれが外から確固たるものに見えれば、孫子の「戦わずして人の兵を屈する」ことになります。

今回の研究開発のポテンシャルも、能力、知識、声望、雰囲気、活動や成果や資料や人材・設備などを蓄積して総合的に得られるものと考えられます。組織としてのポテンシャルと個人としてのポテンシャルは異なりますが、今回の議論は研究所としてのポテンシャルを対象としているものと思います。研究所としてのポテンシャルは能力、知識、声望、成果などを研究所の枠の中で時間的、空間的、あるいは構成員に亘って積分したものとなるでしょうが、その定義にあやふやさが含まれることから、共通の地盤の上で明確に評価されなければならないでしょう。特に、鉄道分野の置かれた状況からは、これからは global な評価が大切になります。

このようにポテンシャルを外部から見た評価で決まるものと考えれば、ポテンシャルを多くの指標についてそれぞれの変数によって積分した関数のように解析的に扱うことは、ポテンシャルをわかりやすく評価し、それを高めるのに役立つのではないのでしょうか。

二つほど例を挙げますと、一つはこのようにポテンシャルを客観的に整理・評価して眺めることによって、研究なり、組織なりのポテンシャルの長短が明確になり、それを高める方法が見えてくるのではないかということです。もう一つは鉄道が総合工学であると言われるですが、先ほど話した空間的な積分はこの総合的な工学領域での積分になります。研究あるいはテーマありきではなく、それぞれの分野における研究や成果が鉄道工学あるいは鉄道システムの中でどう位置付けられるかということを常に意識しながら研究を進めることが大切であるという意識を持つことで、総合的なポテンシャルの向上に寄与できるように考えています。



写真 訓示を述べる 会長 正田英介

熊谷理事長講演要旨

昨年度、平成 29 年度の活動に対して様々な成果を出していただきました。まずは、皆様のリーダーシップに感謝を申し上げたい。平成 30 年度は 4 月 1 日からスタートしていますが、本日は実質的にマインドを共有し、平成 30 年度の研究開発および様々な活動をスタートさせるキックオフになると思います。

昨年度の研究開発では、予定通りの成果があった、目標の成果が得られなかった、期待した以上の成果が得られた、予想しない事柄を発見したなど、色々なケースがあったと思います。そういう面も含めてそれぞれ経験であり、成功例もうまくいかなかった例も含めて一つの個人個人の学びであります。学びは次のステップの経験としてプラスになります。また、その学びを我々経営側と職員の皆様と共有することが大事であり、次の研究開発につなげてまいりたいと思います。

本日はポテンシャルを高めることがテーマです。ポテンシャルとは、持てる潜在能力等々の解釈があると思います。そのポテンシャルを最大限に生かせるか否かは、動的な活動、ダイナミックな研究開発活動です。まずは知識の蓄積によりポテンシャルを高めて、それをどう生かしていくかということの 2 つの歯車が大事だと思います。そういう意味でダイナミックな研究開発と有機的に結びつけるべくポテンシャルを生かしていきたいと思います。このような戦略や目標を強く認識をして進めるということが必要であると思います。私達のビジョンで価値を高めるといことです。この価値を高めるための PDCA のサイクルを動かすことが大事です。ポテンシャルというのは研究開発の土壌であり、栄養を意味するものだと思います。

鉄道総研のミッションということですが、一番大事にしたいものは品質と信頼です。これらを得るために、何を備えていくかということでもあります。ポテンシャルを高め、クライアント、サポーターなど、私達に出資や支援をして頂いている所への研究開発成果をお渡しするということでもあります。私達が思う最高のクオリティーの成果を出すことにより、それが信頼の醸成に繋がっていくという一つの研究開発システム、これを心に抱いて今年度も多様な事業を進めてまいりましょう。



写真 鉄道総研のミッションについて講演を行う 理事長 熊谷 則道

テーマディスカッション要旨

今年度は「研究開発のポテンシャルを高めるために何をすべきか」をテーマに、研究開発のポテンシャルを把握する、発揮する、または高めるための方法について、モデレータの芦谷理事をはじめとする役員と参加者の間で活発なディスカッションが行われました。

その中で、参加者からは「ポテンシャルを把握するためには、外部からの客観的な視点が必要である。」、「ポテンシャルを発揮するためには、現状のポテンシャルを把握した上で適切に業務に取り組むことが重要である。」などの意見がありました。ポテンシャルを高めるための意見では、「人材育成の観点からは、個人の長所を伸ばす指導をすることや最新の技術動向を常に学べる環境を作る必要がある。」、「研究環境改善の観点からは、上長が主体となって働き甲斐のある環境づくりを行う必要がある。」などがありました。



写真 テーマディスカッションでの質疑